

第5次助成先報告



公立小野町地方総合病院企業団
公立小野町地方総合病院整備事業



緑地創造研究会
福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業



福島県厚生農業協同組合連合会
南相馬市鹿島厚生病院併設介護老人保健施設厚寿苑の新設事業

第5次助成

	申請団体	事業名	事業概要	助成金額 (単位千円)
1	宮城県	海底清掃資材 購入支援事業	底引き網漁船によるガレキ撤去のために開発された海底ガレキ回収装置による撤去により、早期に漁場再生するため漁業協同組合等が装置を購入及び修理する費用を助成する。	58,000
2	気仙沼水産 加工業協同 組合	仮設水産加工 場施設設備整 備事業	気仙沼市の仮設水産加工団地内で事業再開する10の水産加工事業体の水産加工場施設工事費用及び設備機器類購入費用を助成する。	217,000
3	三陸漁業生産 組合	「いわて三陸」 夢あふれる漁 業モデル創生 プロジェクト	求められる品質の魚を丁寧に漁獲、加工チーム・販売チームと協働で高鮮度、高付加価値の魚介を安定供給できる体制をつくるための漁具資材、養殖用具等機材購入及び設備費用を助成する。	172,000
4	公立 小野町地方 総合病院 企業団	公立小野町地 方総合病院整 備事業	地域医療復興のため、小野町、田村市、平田村、川内村、いわき市を構成市町村とする地域唯一の総合病院の被災した、倒壊の危険性のある旧館の建て替え費用を助成する。	2,047,000
5	福島県厚生 農業協同組 合連合会	南相馬市鹿島 厚生病院併設 介護老人保健 施設厚寿苑の 新設事業	被災により大幅低下した高齢者保健医療、福祉機能の復旧に必要な病院併設の介護老人保健施設の新設費用を助成する。	1,030,000
6	福島県 楢葉町	仮設校舎敷地 造成工事、仮 設校舎設置事 業	臨時休業措置となっている2小学校、1中学校の本格再開前に、避難地いわき市で仮設校舎による授業再開のため、2年間使用の仮設校舎建設費用を助成する。	191,000
7	緑地創造 研究会	福島県立自然 公園松川浦周 辺の海岸防災 林再生事業	津波で流失した海岸防災林を、盛土による築堤の海岸防災林に再生するために、必要な樹木の地域性を考慮した「地域苗木」の育成と供給をする費用を助成する。	130,000

2015/3
NEW

2015/3
NEW

気仙沼水産加工業協同組合 仮設水産加工場施設設備整備事業

仮設水産加工団地に入る工場の内装や設備などの整備費用を助成

生鮮かつおの水揚で全国一の気仙沼市は、津波により多くの加工場、冷蔵庫施設が被害を受け、保管してあった加工品や原料もすべて流されてしまう。気仙沼水産加工業協同組合は、共同で作業できる仮設水産加工団地の建設を進めるが、国や団体からの支援は建物のみ。設備導入や内装工事などを行うため本助成に申請した。ここには組合と組合員の計9社が入る。「組合が原料を供給し、みなさんには2次加工、3次加工を行ってもらうつもりです」と気仙沼水産加工業協同組合の清水徹二代表理事組合長。だが気仙沼魚市場の水揚量の減少、加工が止まっている間にいくつかの取引先が離れるなど厳しい状況にある。それでも廃水浄化装置を導入し、全員が持てる加工技術を発揮してカツオはもちろん、カキやホタテ、ホヤなどの加工も行い、再起にかけて2012年8月稼働を目指している。【以上、2012年7月10日版掲載情報】

気仙沼市の水産加工業者は、自宅と工場を兼ね備えた小規模なところが多く、施設や設備も数十年かけて充実させてきた。ところがそのほとんどが津波によりあっという間に損壊。原料や加工品も大半が流される。

「今まで積み上げてきた大切なものをすべて失い、どの組合員も着の身着のままで辛うじて避難した状態でした。それでもバラバラになっていた組合員たちが一人、また一人と集まり、これからどうしていくか、話し合いをはじめました。苦しい時こそ、仲間と話すのが一番なんです」と気仙沼水産加工業協同組合の清水徹二代表理事組合長は振り返る。

気仙沼水産加工業協同組合と加盟組合員のうち9社は、気仙沼市が建設する仮設水産加工団地（5棟の仮設工業団地を敷地約2万7000m²に建設）に入居し、再起を図ることにした。しかし国の支援は建物のみ。水産加工場として機能させるには、敷地整備や内装工事、機械設備類が必要となるが、その費用はすべて自己負担である。そこで気仙沼水産加工業協同組合は本助成の活用を考えた。

組合は本助成を活かして敷地などのインフラを整備。津波で破壊されていた仮設団地脇の道路の舗装も行った。また、国の支援も合わせ50t／日の能力を持つ排水処理施設も建設し、周辺の養殖業に迷惑をかけないように配慮も行った。

組合員もそれぞれの加工技術を活かした仕事を再開できるようにと、設備や機器の導入を行い、離れ離れになっていた従業員にも声をかけるなど、工場再開の準備を着々と進めてきた。

そして2012年9月、すでに操業を再開している7社に加え、残り2社の再開のめども立ち、晴れて竣工式を行うこととなった。

竣工式で母体田地区水産加工団地の会の会長であり、マルチ村上商店の村上祐一さんは「被災した時、多くのお客様から励ましの手紙をいただき助けられました。商品を通じてまだ私たちは多くのお客様とつながっていると思うと元気が出てきました。これからはみんなで力を合わせ、一刻も早く震災前の売り上げに戻せるようにしていきたいと思います」と挨拶をした。【以上、2012年10月31日版掲載情報】



仮設水産加工団地のみなさん



内装工事中の仮設水産加工団地



再スタートの成功を願ってテープカット（写真左から3番目 有富理事長）



アスファルトで舗装整備した母体田地区水産加工団地内敷地



50t／日の能力を持つ排水処理施設も建設

気仙沼水産加工業協同組合 仮設水産加工場施設設備整備事業

それぞれの加工技術を活かすための加工機材などを整備

マルチ村上商店では、助成によりカツオ節やマグロの角煮などを加工するために必要な設備を整備した。また仮設工場では手狭なため、一階の加工場と二階の倉庫の作業をスムーズに連携できるように昇降機も導入した。「いままでは工場を建てるこしあ頭になかったですね。でも本当に大変なのは、これからどう維持していくかだと思いますが、お客様の期待に応えて頑張っていきます」と話している。

「震災ごときで自分の人生を決められたくない」と話すマルチユウ齊藤商店の齊藤孝志さんは、カツオ、サンマの他にサバの調味加工も行っていた。助成を活かしてボイラー室や焙乾室をつくり、電気・水道設備を整備。「2012年の6月に再開できたのでお中元のピークに間に合うことができました。今後は問屋だけでなく一般のお客様にも販売したい」と考えている。

カツオとサンマの加工を主に営むかねたけ畠山商店の畠山孝志さんは「残った道具をもとに掘建て小屋でもなんでもいいから再開してやろうという意気込みでしたので、ここに参加できて本当にうれしいです。助成では内装や電気、水道工事を、また冷風乾燥機なども整備できました。以前はカビ付けしたカツオ節もつくりましたが、それにはまだ設備が足りません。いまはなまり節、削り節の材料づくりから再開しています」と話している。

カネヒデ吉田商店の吉田久雄さんは、サメの加工を行っていたが、いまはカヒレ加工の一部を再開。「お陰さまで必要な機材は揃えることができました。まだ売り上げは3割～5割程度と少なく、再開できるまでに失った取引先もありますが、まじめにいい品物をつくってもとに戻していきたいですね」と話している。

サンマのみりん干しや甘露煮、イカの塩辛などを製造しているやまひろ佐藤商店の佐藤卓威さんは「仲間に一緒にやろうと声をかけられたのがなによりもうれしかった。お客様はうちの味を覚えてくれているはず、そう信じてがんばります」と話している。助成では塩辛をつくる機械、冷蔵庫や冷凍庫、製氷機なども購入した。

仮設水産加工団地で工場を再開できようになるまで約1年半の期間を要した。その間に離れてしまったお客様も少なくなく、またいままでつくってきたすべての加工品を製作するにはまだ設備も完全ではない。さらに、必要な材料の確保や後継者の問題など、仮設水産加工団地ではまだ多くの問題を抱えている。それでも気仙沼の水産加工業がかつての姿を取り戻せるように、いま一人ひとりが前向きに自分の仕事に取り組んでいる。

【以上、2012年10月31日版掲載情報】



一階から二階へ荷物を運ぶ昇降機を導入（マルチ村上商店）



カツオ節をいぶす焙乾室、ボイラー室を設置（マルチユウ齊藤商店）



作業場の電気、水道設備を整備（かねたけ畠山商店）



カヒレ梱包圧縮機、製氷機やフォークリフトを購入（カネヒデ吉田商店）



イカの塩辛をつくるフィッシュカッターや、冷蔵庫、冷凍庫を購入（やまひろ佐藤商店）

気仙沼水産加工業協同組合 仮設水産加工場施設設備整備事業

各社の技術とアイデアを活かして、気仙沼ならではの新商品の開発に挑む

気仙沼市が用意した仮設水産加工団地（母体田地区水産加工団地）に、気仙沼水産加工業協同組合が組合員9社とともに入居して、約1年が過ぎた。その後、気仙沼の水産加工事業はどう進展しているのだろうか。

「正直、状況はまだまだ厳しいです。津波にすべてを流され、仕事を再稼働できるまで、早い組合員で半年、中には1年以上かかったものがいます。お客様とのつながりが途切れていたこの間に、市場は大きく変わってしまいました」と清水徹二代表理事組合長は話す。失ったものは、工場や設備だけではない。大きな痛手は、お客様が他の取り引き先に変更してしまったことである。以前の30%ほどまでに減ってしまったお客様。後5年で残りの70%をコツコツと取り戻せたらと考えている。「それでも前向きでいられるのは、組合員が互いに気持ちを一つに頑張っているからだと思います」と同席したカネヒデ吉田商店の吉田久雄さん。「いままではライバルだった各社が“そっちはどうなってる？”と仕事だけでなく、互いの生活のことも含めて、心配し合い声をかけ合って一緒に頑張ってるんですよ」と話す。

「お客様を取り戻していくには、気仙沼の商品は本当に安くて良いものだと再評価されるしかない。例えば、新しいギフト商品なども開発して競争力をつける必要があります。それには、お客様の希望に沿う商品の開発を行えるように、互いに技術を高め合い、グレードを上げていかなければなりません」と清水代表理事組合長。「気仙沼は、カツオの水揚げが日本一と有名ですが、メカジキ、サメも日本一なんですよ。水揚げも7割ぐらいまで戻ってきています。このサメの身を新商品にできないかと、いま私の息子たちが市役所の方と一緒に開発に取り組んでいるんです」と吉田さん。サメの身には骨がなく、栄養価が高く、コラーゲンも豊富。肉質は鳥のササミよりも柔らかくフライにするとナゲットのようになる。「子どもたちの給食やお年寄りの介護食などに最適だと思います。どんな商品を開発するか。また、どんな料理方法があるのかを上手にアピールするとともに、サメの肉という消費者になじみの薄いイメージをどう変えていくのかも大事です。ネーミングも考えながら、これからはサメの町・気仙沼として町おこしにもつなげられるように頑張ってみよう」とアイデアを出し合っています」と、気仙沼市産業部商工課主査の平田智幸さんは、今後の取り組みについて説明してくれた。

「我々組合員には、それぞれ得意とする専門の技術・ノウハウがあります。この助成のおかげでそれを行える設備も取り戻せました。今までバラバラだった組合員が、心を一つに団結しているのだから、単なるサメの身ではない気仙沼ならではの商品として付加価値を付けていきたい」と清水代表理事組合長は話している。豊富な海産物をプロのアイデアと技術を使って、新しい気仙沼の魅力を伝えるどんな新商品がこの加工団地から誕生していくのか、楽しみである。



みんなで力を合わせて気仙沼の水産加工業の復興を！組合員たちの結束は固い



気仙沼は上質のフカヒレで有名、このサメの身を新商品にしようと計画している



「サメではなく、フカヒレの身のイメージで売り出したいですね」と話すフカヒレづくりの専門家である吉田さん

気仙沼水産加工業協同組合 仮設水産加工場施設設備整備事業

地元の食材で商品を開発し、気仙沼の水産加工業を再生していきたい

「津波に自宅や工場を流され、事業再建の資金などとても工面できない」。気仙沼水産加工業協同組合は、共同で作業できる仮設水産加工団地を建設し、2013年9月に竣工式を行った。これまで、この竣工式と再出発を果たした5社の姿を紹介したが、今回はその後スタートした四つの会社について報告する。

従業員を避難させ、一人工場に残った(有)マルナリ水産の植木実社長は、逃げ遅れて津波に襲われる。「なんとか自宅の屋根に登りましたが、家と一緒に3日間も流されました。周りの水が引かず、食糧も水もなく、服も濡れたままでもう限界でした」。まさに九死に一生を得たものの、家も工場もすべて失うことになりました。地元の土産店、問屋などに納めるサンマの昆布巻の売上が伸びはじめ、これからという矢先だった。そのため仮設水産加工団地の話を聞いてもなかなか決心できずにいた。

「外で働いていた息子に、せっかく昆布巻きの仕事が軌道に乗りはじめたのだから、やるなら俺が手を貸すからと言われました。また、地元の納品先からも、つくったら一生懸命売るから持ってこいと声をかけてもらえたのが後押しになりました。ただ資金集めが大変で、この助成がなかったらあきらめていたと思います」。マルナリ水産が、工場を再開できたのは竣工式の3ヵ月後。工場は以前の約半分の規模になった。

「従来通りの種類の製品を製造するには、工場のスペースも狭くなりましたし、十分な設備を買い直すほどの資金はありません。そこで昆布巻きを主力に絞って方向転換することにしました。サンマの昆布巻である程度成功していましたから、今後は、この第2弾、第3弾とバリエーションを増やしていくつもりです。中に入れる物もサンマだけではなくニシンやサケなど、気仙沼らしさを出せる商品にしたいと考えています」。

マルエイ千田商店の千田裕さんは震災に襲われた時、奥さんと二人だった。「今までにない凄い揺れだったので、これは津波が来ると、女房と別々の車で避難しました。すでに道路は大渋滞でしたので、避難所と逆方向のホテルの駐車場に逃げ込みました。ところが女房の車が来ていない。慌てて周りの建物を探すと、魚市場の屋上にいる姿が見えてほっとしました」と千田さん。そこで津波が町を飲み込んでいく姿を目撃する。大川河口近くにあった工場は、跡形もなくなってしまった。「しばらくは力も出なくてボーツと過ごしていました。仮設団地の話がなかったらどうなっていたか」と振り返る。

事業を再開できた時は、震災から1年半が経ち、取引先だったスーパーなどにはすでに別の業者が入っていた。「ほとんどゼロからの再スタートでした」と千田さん。震災前、個人直販の仕事が増えていたが、そのお客様情報も津波で失ってしまう。

「住宅地図を見て、記憶を辿り、仕事を再開した案内を送りました。その甲斐あってお客様も少しづつ増え、いまうちの仕事の99%を個人直販が占めています。主力商品はサンマの南蛮漬けでしたが、個人への直販を考えた時に、商品の種類が多い方がギフトなどでも喜ばれるので、いまはレパートリーを広げ、18種類まで品数を増やしています」と工夫を凝らしている。



昆布巻きを中心事業を再開



気仙沼らしい昆布巻きをつくりたいと植木社長(右)



家族一丸となって再建に臨む



まさにゼロからの出発だったと千田さん(右)



商品は10種類から18種類に

気仙沼水産加工業協同組合 仮設水産加工場施設設備整備事業

それぞれの得意な技術を活かした新商品で、新しい販路の獲得へ

大弘水産（株）の工場は、幹線道路から道を一本入った所にあったが、車両が入れるようになったのは、震災から2ヵ月も後だった。「従業員と一緒にガレキをかき出し、使える備品を取り出し別の場所に移動して洗浄する、これの繰り返しでした。重い機材を動かすのにフォークリフトやクレーンも借りてきました」と小野寺大輔専務取締役。しかし、液状化で地盤沈下が発生した工場の跡地には建築制限がかかり、ここでの再建は数年先も困難な状況に。「それで仮設水産加工団地に入居したのですが、今度は配管などの工事が進まず、周りからいつはじめると聞かれるのが辛かったです。業務を再開できたのは仮設水産加工団地で一番遅くなり、従業員も半数に減ってしまった。

「それでも再開すると、いろいろな方から声をかけていただきました」と小野寺氏はうれしそうに話す。中には“そちらの燻製ノウハウで、こんなものがつくれないか”というような新商品開発の話もあった。

「この燻製品やメサバ、ホッケ醤油味醤などは、問屋さんなども好意的に迎えてくれました。また給食関係の仕事も再開できています。こうしたお客様の存在はもちろん、今まで当たり前にあったものの大切さをヒシヒシ感じています。いまはお客様に満足いただける商品をつくることを一番に考え、事業を盛り返していくつもりです。」

（有）林健商店の林孝輔代表取締役も地震による液状化の怖さを体験している。「グラグラっときて慌てて道路に出ると、とても立っていられない状況でした。四つん這いになりこらえていると、今度は液状化で側溝と側溝の間からパッと水が吹き上りました」と林さんは話す。とにかく避難しようと車を出すが、道路は大渋滞。車を捨て高台まで歩いてなんとか逃げ延びた。しかし、カツオ、サバの生利節製造を行っていた工場は、津波に流されてしまう。もうやめるしかないと落胆していた時に、仮設水産加工団地の話を仲間から聞いた。

「年齢も年齢なので、どうしようかと思いましたけど、うちはじいちゃんの代、昭和13年からやってましたから、頑張れる間は続けたいと参加しました。1年半のブランクと作業環境が変わったせいか、最初は思ったようにうまく製品をつくれず、つまずきながらの再出発でした。お客様も仕事量も約半分に減ってしまったが、仮設水産加工団地に入った組合員同士で励まし合い、新たな販路の獲得に挑んでいるという。

「今までうちの商品を並べてもらっていたお店の商品棚には、別の会社の商品が並んでしまっています。そこにもう一度食い込む、また新たな販路を拡大するには、今までの商品だけでは無理だとわかりました。そこで、サケの削り節やサメの心臓の燻製など、新しい商品をつくりはじめたんです。いまこの新商品を新しいお客様に卸し、販売してもらっています。これで、少しでも仕事が増えていったらと踏ん張っているところです。」

2013年12月、組合員が原料や商品を冷蔵保存できる気仙沼水産加工業協同組合の新倉庫が完成した。「仮設水産加工団地に助成をいただいたお陰で、国や県、市などの援助をこちらにまわせました。長期保管できる施設が足りず苦労してきた組合員にとって大きな一歩です」と熊谷昌二常務理事。必要な施設を一つずつ整備しながら、気仙沼市の水産加工業は再生の道を進んでいる。



大弘水産のみなさん（写真右が小野寺専務）



特技を活かし新商品を開発



燻製品の製造に励む従業員



林健商店のみなさん（中央が林さん）



サメの心臓の燻製を試作



完成した「赤岩冷蔵工場」

【以上、2014年4月30日版掲載情報】

三陸漁業生産組合 「いわて三陸」夢あふれる漁業モデル創生プロジェクト

自分たちの獲った魚を自ら加工し、より魅力的な製品として販売

岩手県大船渡市にある漁師町・越喜来地区は、572隻あった漁船のうち500隻を震災で失う。「助成を得て漁船を購入できても、後継者不足で衰退するこの町が本当に再生できるのか」と漁師の熊谷善之さんたちは悩んだ。そこで自ら漁業を再生した実績のある静岡県・由比港漁業協同組合よりノウハウを学ぶことにした。「自分たちが獲った魚を魅力ある製品へと加工し、自分たちの手で販売していく」。この目標に向かって漁師仲間と三陸漁業生産組合を作り、高鮮度水揚げを可能にする最新の漁具資材や低温輸送車などの設備費を申請した。今後は豊かな漁場・いわて三陸海岸で獲れたタコ、カニ、ノドグロ、ツブ貝などを、消費者に喜ばれる製品化・販売方法を考えアピールしていく。そのため高鮮度な製品の長期間保持を急速凍結庫で行うチーム、また浜の郷土料理・漁師飯を提供する食堂や直売所と連携。次世代につながる新しい漁業への転換を図り、2012年10月の本格稼働を目指している。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

漁の再開に向けて高台に借りた倉庫では、膨大な数のロープ束を漁具に仕上げる作業が続けられている。生産回復に必要なカニカゴの数は5万個強。イサダ漁や刺し網漁などに使用する漁具作りの追い込みを続け、今年度中には全組合員を海に戻せる段取りが整ってきた。

また、操業を再開した漁業者自らが、カゴ漁に必要な生エサの支度から、未利用資源の加工出荷まで行い、活気に包まれた新しい仕事場も誕生している。生産直売を通して、消費現場が求める品質を把握することで水揚げ物の高品質化につなげる効果も期待されている。

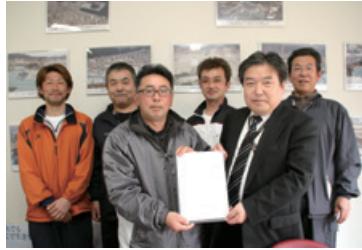
現在、地域水産業の復興に向けて、製氷施設や最新の冷凍保管施設、荷捌き場などの整備計画の最終的な詰め作業を行い、年度内の完成を目指している。三陸漁業生産組合では「今後は地域の仲間たちと協力し合いながら、当浜で水揚げされる魚介類を産地でしっかりと商品に磨き上げ、消費者に喜ばれる形で供給できるような“浜の6次産業化モデル地域”としての役割も果たしていきたい」と考えている。【以上、2012年10月31日版掲載情報】

2013年1月14日、三陸漁業生産組合の共有使用船舶“第十七天王丸”の進水式が行われた。

津波で大切な船をなくし、一度は働く意欲を失いかけていた漁師たちが、新しい船に乗り颯爽と海へと進水していく。自分たちの船を手にしたことで、その表情は震災前のように活気と明るさを取り戻しつつある。春からは、この船に助成で備えた漁具を携え、操業再開を目指す計画だ。

進水式では、仲間から船頭の熊谷善之さんにお祝いの盾が贈られた。この盾には、助成を活かして越喜来地区の水産業が復旧の一歩を踏み出したことを記念し、大漁旗の柄と一緒に東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金のマークも刷り込まれている。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



三陸漁業生産組合のみなさん



ロープ束を解き、切り出して一つひとつ漁具を製作



海原を進む三陸漁業生産組合の共有使用船舶“第十七天王丸”



船の安全と大漁を祈願し進水式を行った 進水式で贈られた記念の盾

三陸漁業生産組合 「いわて三陸」夢あふれる漁業モデル創生プロジェクト

製氷、荷捌き施設も完成し、6次産業化はこれからが本番

2013年5月11日、大船渡市越喜来地区の三陸漁業生産組合が建設していた水揚げと生産の要となる“製氷冷凍荷捌き施設”が完成した。管理棟と荷捌き棟からなるこの施設には、水揚げした魚類を急速冷凍し、-35℃の環境で鮮度を保ったまま25tまで保管できるCAS機能冷凍保管庫も備えている。完成を祝う竣工式で三陸漁業生産組合の瀧澤英喜組合長理事は「多くの方々の応援を受け、荒涼としたこの場所から新しい物語が生まれようとしています。私たちの夢がより多くの方々の夢となるように、そしてこの東北が再び元気に、そして豊かな場所によみがえるように、ご支援いただいた多くの設備をもとに、早速、本日からこの場所で業務をスタートさせていきます」と挨拶した。

「4月末まで続いたイサダ漁が一段落し、これからはカニやタコのカゴ漁がはじまります。お盆くらいまでは、カゴ漁で忙しくなりそうです」と漁師のみなさんはうれしそうに話す。

この新施設の完成で、ノドグロやツブ貝、タラなどの季節に応じた魚介を水揚げし、三陸海岸ならではの新鮮な海の幸を、高鮮度で魅力的な商品として、漁師自らが加工・販売していく6次産業化も本格的に進めることができる。

「若者たちがこの町で水産業に就きたいと思える、そんな夢あふれる漁業へ」。越喜来地区の新しい漁業のスタイルを築き、より発展できるように、これからが夢のプロジェクトの本番である。

【以上、2013年10月31日版掲載情報】

「漁師の仕事を思い切り堪能しているよ」。2014年3月末、越喜来地区を再訪した我々に、漁師さんたちはみんなうれしそうに話しかけてくる。「昨年12月に組合員全員に船が行き渡り、養殖とカゴ漁の両方で1年を通してずっと船を出せるようになりました。船が手に入るまではと踏ん張ってきた甲斐がありました」と三陸漁業生産組合の熊谷博之さん。「いまは12月にはじまった毛ガニのカゴ漁が大詰め。他にもカレイやヒラメ、ツブ貝、ノドクロが次々と揚がり大忙しです」。熊谷さんは、漁の話をはじめると止まらなくなる。三陸漁業生産組合では、他にもホタテ、ホヤ、ワカメ、ムール貝の養殖も行い、漁獲量は徐々に回復に向かっている。また組合では、より効率的に仕事を進めるために、養殖、カゴ漁、市場とそれぞれの得意な仕事に役割を分担する組織改革や漁船の再編成も計画中。「新鮮な魚介を使ってより良い商品づくりを」そんな夢あふれる新しい漁業の創生に向けて意気盛んである。

【以上、2014年4月30日版掲載情報】



共有使用船“第十七天王丸”の上に立つ熊谷理事、5月からはタコ漁の準備をはじめる



水揚げ、生産の拠点となる新しい製氷、冷凍荷捌き施設



竣工式で挨拶する瀧澤組合長理事



水揚げされた水産物を急速冷凍できる荷捌き施設の中に作られたCAS機能冷凍保管庫



カゴ漁でとれたミズダコ



組合で唯一牡蠣の養殖を行っている熊谷博之さん。ちょうど10カ月になる牡蠣を見せてくれた。大きく育てて収穫するのは1年後という



公立小野町地方総合病院企業団 公立小野町地方総合病院整備事業

災害に強い、患者さんと地域の方にやさしい新病院の建設へ

公立小野町地方総合病院は、59年前に小野町、田村市、平田村、川内村、いわき市の5市町村が出資して建てた総合病院である。1970年に旧館が、1990年には新館が建てられた。入院病床は119床、外来診療は内科をはじめ10科が診療を行い、地域住民の医療を支えるかけがえのない存在となっている。そんな公立小野町地方総合病院が震災で甚大な被害を受ける。特に旧館は倒壊の危険性が指摘されるほどに。震災時、旧館には100人ほど入院患者さんがいたが、病院と役場の職員が協力し合い対応した。「なにも情報が届かず病院のスタッフも不安だったと思うのですが、だれも避難しようとはしませんでした」と藤井文夫企業長は当時を振り返る。5市町村には避難区域となっている所も多く、今後被災者が帰還する上でも医療環境の整備は急務である。本助成により、被害を受けた旧館の建替えによる新医療施設は2014年11月竣工を目指している。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

2013年10月4日、公立小野町地方総合病院企業団（以下：小野町病院）が、2014年12月の完成を目指す『公立小野町地方総合病院』の起工式を行った。起工式で藤井文夫企業長は「これまでより質の高い医療を提供できる新施設へと充実させ、地域のみなさまがより安全・安心に暮らしていただける病院を目指します」と挨拶。小野町病院の大和田昭理事長は「この地域の復興のシンボルであるこの病院を中心に、保健、医療、福祉、介護の充実が図られるものと期待しています」とお祝いの言葉を述べた。

震災で、小野町病院・旧館が受けたダメージは大きい。壁にはクラックが走り、給水塔の配管も壊れ館内的一部は水浸しに。このままでは倒壊の危険性もあり、1日も早く改築を行いたいが、それにはいま機能できている診療や入院を制限しなければならない。2012年度の小野町病院の患者数は、入院で39317人（前年比14.8%増）、外来で41820人（前年比4.0%増）と増加している。診療などに影響の少ない移転新築が望ましいが、それでは原形復旧が原則の国の支援を受けることは難しかった。

「福島県浜通り地方の医療機関は、いまだ診療再開の見通しは立っていない状況です。この病院の機能を1日も早く完全に復旧させる必要がありますので、この助成には心から感謝しています」と藤井企業長。

新病院は、警察や消防署が隣接する町の中心地に地上4階建て、敷地面積7897.17m²、延べ床面積8533.45m²の規模で建設される。入院機能は現在と同じ119床。予定地域全体の医療を考え、泌尿器科や救急医療などの専門の対応ができる設備も導入する。また震災の経験を活かし、災害時でも安定的な医療が提供できるように、ライフラインの多重化や1階待合室をトリアージスペースとして活用できる設計にした。

“災害に強い病院、患者さんや地域住民にやさしい病院、そしてスタッフにも使いやすい病院”へと生まれ変わっていく小野町病院。今後、避難区域の見直しに伴い、徐々に自宅へと戻る住民が増えていく中で、新病院の完成により、いつでも安心して医療を受けられる体制が整うことを、多くの住民が心待ちにしている。 【以上、2013年10月31日版掲載情報】



公立小野町地方総合病院企業団
 ●鉄骨造り（耐震構造II類）、地上4階+塔屋階 ●駐車台数：一般駐車場80台、夜間・救急用駐車場12台



警察署と並んで建設される新病院



鍵入れの儀を行う有富理事長（写真左）



「地域医療の充実に務めます」と藤井企業長

2015/3
NEW

公立小野町地方総合病院企業団 公立小野町地方総合病院整備事業

患者さん中心の医療へ、地域の中核となる新病院が完成

2015年2月14日、『公立小野町地方総合病院（以下：小野町病院）』が完成し、落成式が執り行われた。小雪がちらつく中、約100名の方が出席。式典の前には、竣工碑の除幕とテープカットが行われた。

藤井文夫公立小野町地方総合病院企業団企業長は「これほどの早さで新病院を完成できたのは、士気の高い職員が一丸となり取り組んでくれたお陰だと感謝しています。今後も職員一同それぞれの役割に励み、地域の中核病院として患者さん中心の医療を実践して、みなさまに一層信頼される病院を目指してまいります」と挨拶した。大和田 昭公立小野町地方総合病院企業団理事者会理事長（小野町町長）は「当病院は地域復興のシンボルとなる存在です。これからも地域医療の最後の砦として、保健、医療、福祉、介護の充実を図つていけるように期待しています」とお祝いの言葉を述べた。

落成式を見守る病院スタッフの胸には、これまでのさまざまな思いが去来する。「すべてがあつと言う間のできごとであり、昨日のことのようにも感じます」。そう話す新田俊幸事務長兼総務課長兼施設整備室長は、震災の10日前に病院に赴任したばかりだった。「打ち合わせの最中に突如グラグラッときて、あちこちから悲鳴が聞こえました。スタッフには急いで病室へ走ってもらい、私は大騒ぎになっている隣の透析室へ向かいました。ドアを開けると、壊れた給水管の水が天井から漏れ出していたのです。慌ててそこにいたスタッフと、患者さんの命をつなぐ大切な医療機器にシートをかけてまわりました。その後、外来に行こうとしましたが、廊下のいたるところにブロックが散乱。通路を確保するため、今度はその片付けをはじめたのです」。副院長兼看護部長の坪井裕子さんは、車で訪問看護に出かけていた時に震災に襲われる。「この後どうすべきかを確認するため、病院へ電話をしたのですが、まったくつながりません。とにかく一人暮らしの患者さんのことが心配で、そのまま訪問看護を続けました。患者さん宅を訪ねると、襖は外れ、家具が倒れ、窓ガラスも割れるなど大変な状態です。ご自宅に残っていた患者さんを離れた場所に住むご家族の元にお送りした後、病院に戻りましたが、病院も大変な状態になっていました」。診療技術部長兼薬局長兼栄養室長の渡辺清さんは「薬局で勤務中に、地震に遭いました。棚の薬瓶が落下して床に散乱。ガラスも割れて足の踏み場もありませんでした」と話す。

特に旧館は、倒壊の危険が指摘されるほど深刻な被害を受け、壁にはクラックが走り、天井が落ちた部屋も。給水塔の配管が壊れたため、館内は水浸しになっていた。まずは全102名の入院患者さんと、14名いた外来患者さんをスタッフ総員で安全な新館や避難所に移動。しかし、この状態ですべての入院患者を守ることは困難である。被害の少なかった国立病院機構 福島病院の1病棟を借り、医師2名、看護師10名が60名の患者さんと移ることになった。



町の中心部に建てられた小野町病院は復興のシンボルでもある



竣工式で式典はスタート（左から3番目が有富理事長）



病院入り口に立てられた竣工碑



落成式で挨拶する藤井企業長



左から副院長兼看護部長の坪井さん、診療技術部長兼薬局長兼栄養室長の渡辺さん、事務長兼総務課長兼施設整備室長の新田さん

2015/3
NEW

公立小野町地方総合病院企業団 公立小野町地方総合病院整備事業

「いい病院をつくりたい」との思いからすべてをスタート

震災後は、別の病院や原発事故で避難されてきた患者さんも来院されるようになり、薬を出したくてもいつ在庫が切れるかわからない状態であった。「いつもは1ヵ月お渡しする所を2週間分にするなど工夫し、新しい薬が届くまでの約1週間を乗り切りました」と渡辺さん。不足していたのは薬だけではない。スタッフが福島病院に移動する燃料も満足に確保できず、新田さんはガソリンスタンドの長蛇の列に並び、燃料の確保に走り回った。

食料は、スタッフが自宅でおにぎりを握り炊き出しをしてくれたお陰で急場をしのぐことができた。「藤井企業長におにぎりをお渡しすると、とても喜んでいただけました。医師は交代しながら24時間体制で勤務されていましたので、自宅にはほとんど戻られていなかったのです。あの頃は、患者さんのことで頭がいっぱいになり、みなさんが食事も満足に摂られていないことに気づいていませんでした」と新田さん。坪井さんは「この時期が一番苦しかった。スタッフも被災者であり、守る家族がいますので、残ってくれと無理強いてはいけません。それでも誰一人欠けずによく頑張ってくれました」と振り返る。やがてライフラインが復旧。食料や薬などの必要な物資の調達も可能となり、3月末には福島病院から患者さんを呼び戻せる状態になった。しかし、旧館が使えないため、使える病床数は限られている。

「震災後、この地域で開院し続けられた病院は、当院を含めて3軒だけでした。地域の医療を担う病院としては、早急に補強か建て替えが迫られていましたが、国や県、市町村からの財源措置もままならず、正直もうだめなのかと思いました。そんな時、助成の決定をいただけて、夢のようでした」と新田さんは振り返る。

落成式の後、新病院の内覧会が行われた。出席者は真新しい手術室から広々とした病室まで、患者さんの立場ですみずみまで工夫された新病院を見学。

「震災後の混乱の中、一人も持ち場を離れることなく、ここまでよく頑張ってくれました。いまの課題は、現在休診中の休日夜間外来の再開です。これからも全スタッフが力を合わせ、より使いやすい親しみやすい病院を目指し、地域のみなさまのご期待に応えてまいります」と藤井企業長は話す。

完成した小野町病院の病床数は119床、診療科目は泌尿器科、形成外科を加えた12科に増えた。1階には外来診察に関連する薬剤、栄養、検診などを集約し、受診時の患者さんの負担が少ない動線にした。2階は手術や人工透析などの機能を配置。3、4階の病室は、従来よりベッドスペースを広く取るなど、療養環境も充実している。小児科には、安心感を与えるためにカラフルでかわいいイラストの壁紙を採用。他にもお年寄りが待合室で長時間座っていても疲れないようにと、特注のソファーも導入し、病院全体で採光を多く取り、患者さんが快適に過ごせる明るい空間にした。また、震災の教訓をもとに“災害に強い安心・安全な病院”を目指し、災害時には1階のロビーでトリアージができるよう設計している。



開放的で明るいロビー、緊急時にはトリアージできるように設計



バリアフリー構造の119床の病室



診療室前のゆったりと過ごせる待合室



お年寄りが楽に座り立ち上がるよう取っ手も付いたソファー



小児科待合室はかわいい壁紙にして子どもたちに安心感を

2015/3
NEW

公立小野町地方総合病院企業団 公立小野町地方総合病院整備事業

地元内覧会に約600名が出席、地域の期待は想像以上に大きい

医療設備には、新たに磁気共鳴画像装置（MRI）を導入。X線透視診断装置などの機器を更新し、透析室には計15台と透析装置を増台した。「設備が不足し透析を受けられない患者さんが7名ほどいらっしゃいましたが、これで受け入れができます。立派なハードが完成しましたから、ソフト面も負けないようにスタッフで力を合わせ頑張りたいと思います」と坪井さん。

「私は地元の人間ですので、みなさんの気持ちが痛いほどよくわかります。みなさんの希望に一つひとつお応えしながら、この病院ができたよかったですと言つていただけるように努力していきたいですね」と渡辺さん。

新田さんも地域の中核病院として地元にもっと貢献したいと考えている。そのためにも人数を増やし、緊急救命医療にも対応できる体制を整えたいと話す。「2月に地元新聞で新病院のことが紹介されると、早速、看護師の応募がありました。ぜひ多くの方に当病院で活躍していただきたいと願っています」。新病院は、患者さんだけではなくスタッフの働く環境としても工夫を凝らしている。当直室にはシャワーだけでなくバスタブも設置。また診察や治療の際、迅速に動ける動線に設計している。

翌15日は、地元住民の内覧会が開催され、約600名の方が新病院を来訪。一時はロビーがいっぱいになるほどの盛況となった。「地元の方が当病院にどれだけ期待されているか、改めて知ることができました。お帰りの際には、みなさんがわざわざ私のところにいらっしゃって『明るくて広い病院になりましたね』『ホテルみたいなきれいなロビー。病気でなくても泊まってみたい』『椅子もとても座り心地がいい』『診察室のデザインも工夫してますね』と声をかけていただきました。安心して使える病院をつくろうとの思いからはじまった今回の病院建設ですが、みなさんに喜んでいただけて、本当によかったです」と新田さんは話す。小野町病院は、2月26日～3月1日で移転作業を完了し、3月3日から診療を開始している。



ナースステーションを真ん中に東西に病室が並ぶ設計



事務室からも駐車場の患者さんの様子が見えるように配慮されている



MRI室も整備

[新施設の概要]

- 建物：鉄骨造り（耐震構造II類）、地上4階+塔屋階
- 敷地面積：7,543.27m² ●延べ床面積：8,620.68m²
- 一般駐車場：77台 ●病床数：119床（一般病棟60床、療養病棟59床） ●診療科目：12科（内科、婦人科、外科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、整形外科、リウマチ科、麻酔科、皮膚科、泌尿器科、形成外科）
- ※地域の中核病院として災害時にも病院機能の維持・確保が図れるようにライフラインを多重化し、燃料や水などが備蓄できるように計画。



長時間の治療でも快適に過ごせるように明るい採光にした15床ある透析室



手術室



X線透視診断装置で説明を受ける有富理事長（中央）



スタッフが動きやすいうように動線も工夫した診察室



福島県厚生農業協同組合連合会

鹿島厚生病院併設介護老人保健施設 厚寿苑の新設事業

震災で低下した高齢者保健医療、福祉機能の早期回復を支援

福島県相双地域では、多くの医療関連施設が原発事故による避難区域に該当し、8施設あった介護老人保健施設（以下老健）が4施設に、14施設あった特別養護老人ホーム（以下特養）は7施設に、16病院も9病院へと減少し、高齢者医療、福祉介護機能が著しく低下した。南相馬市にある「鹿島厚生病院併設介護老人保健施設 厚寿苑」は、地震の被害はあったが幸い原発事故による避難区域外であったため被災後も機能を維持し、フル稼働できている。しかし、避難されてきた約2000人の中には高齢者も多く、いまの病床数では対応しきれない。そこで早期に増床を進め、100名の定員へと強化できるように本助成に申請を行った。相双地区住民の待ちのぞむ新施設は2013年11月の竣工を目指している。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

南相馬市の一部の地域は、第一原子力発電所から30kmの範囲の警戒区域や緊急時避難準備区域に指定され、高齢者を含む多くの被災者が指定外地域の中心部に位置する鹿島区へと避難した。しかし、避難区域内の病院や老健施設の機能がストップしたことで、相双地域の医療・介護環境は行き詰まってしまう。特に老健施設など介護施設の不足は深刻な状態に。そこで鹿島厚生病院および併設の『介護老人保健施設 厚寿苑』を運営する福島厚生連は、現在の58床から100床に、通所リハビリテーションの定員も1日20人から40人の2倍に拡充する計画を立て、2014年1月の完成を目指して動き出した。

2013年1月31日に行われた起工式で、福島厚生連の庄條徳一経営管理委員会会長は「地域に不足している介護や福祉の需要に応え、さらに高齢化対策を含めた包括的な医療、介護も提供できるようになります」と挨拶。櫻井勝延南相馬市長は「せっかく津波から逃れて助かった命を、医療や介護環境が整わずに失うようなことがあってはなりません。みなさんが待ち望んでいる介護施設が完成すれば、復興への期待の星となると思います」と現状を訴えた。

避難所で暮らす多くの方が安心して暮らせる体制を整えるため、工事は着々と進行している。新施設には居室、機能訓練施設のほかに地域の方が集まる地域交流スペースも併設する予定である。

【以上、2013年10月31日版掲載情報】



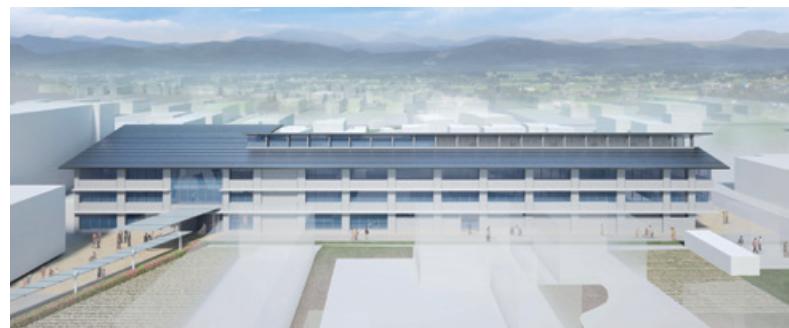
現厚寿苑の駐車場に新施設を建設する



「地域の強い要望に応える施設に」と庄條経営管理委員会会長



「いまは形に見える復興がなによりも心の支え」と話す櫻井勝延南相馬市長



鹿島厚生病院併設介護老人保健施設 厚寿苑

●建物：鉄筋コンクリート造、地上3階建て ●敷地面積：2992.27m² ●延べ床面積：3647.17m² ●収容人員：病床数／100床、通所リハビリテーション／40人(2単位)

福島県厚生農業協同組合連合会
鹿島厚生病院併設介護老人保健施設 厚寿苑の新設事業

高齢者医療・介護の新施設が完成、病床数、通所定員数は約2倍に拡大

2014年1月30日、鹿島厚生病院併設介護老人保健施設『厚寿苑』の竣工式が執り行われた。竣工式で福島県厚生農業協同組合連合会の庄條徳一経営管理委員会会長は「震災で施設が減少した相双地域の高齢者医療・介護の充実を担う中核施設となりたい」と挨拶。櫻井勝延南相馬市長は「厚寿苑は南相馬市の復興の希望の砦です」と祝辞を述べた。ここには最新の介護、療養、リハビリ設備などの他に、全室に感染防止を配慮したスーパー次亜水の空間噴霧方式も導入している。渡邊善二郎施設長は「こんなに素晴らしい施設を作っていただいたので、今後はスタッフの増員も図りながら、それに負けないサービスを実現したいと思います」と話している。

2月1日の開所を前に、スタッフは喜びと安堵の気持ちで一杯である。「震災に襲われた時、私は通所されていた18名の方と一緒にいました。激しい地震と混乱状態の中、なんとか平静に対処しようと懸命でした」と看護師の西内光枝さん。「みなさんが帰宅できるように順次車でお送りしましたが、海沿いに住む方は津波の恐れがあるため、道路を使えず、またここに戻ってくることになりました」と介護福祉士の青田浩二さん。入所されていた方52人と合わせ60人近くの方が、約1週間、ここで雑魚寝状態で過ごすことになる。作業療法士の涌井美貴子さんは「おむつや薬などが不足してくると不安も募りました。当時、20名ほどのスタッフがいましたが、避難せざるを得ないスタッフもいて、残った者は当直を繰り返してケアにあたりました」。スタッフの奮闘は、利用者たちが被害の少なかった県南の三つの施設に分散して避難するまで続いた。

その後、原発による避難指定が解除されると、徐々に利用者さんも町に戻ってきた。しかし、急増した高齢者と減少した施設という状況で、旧施設の定員を遥かに上回る入所希望者が殺到。「旧施設を改築してもキャパが少なく、新施設を建てるには予算がない。助成が決まった時は本当だろうかと驚きましたが、こうして立派な施設が完成し、心から感謝しています」と青砥正事務長。新施設は、これまでの58床から100床に拡充され、通所リハビリテーションの定員も1日20人から40人の2倍になる。

「全体に広々として、採光も配慮した快適な施設になりました」と青田さん。「リハビリ設備もより充実し、使い勝手も良くなっています。仮設住宅や借上住宅の生活によるストレスなどで認知症が進行する方も出ていますので、その介護や予防にも頑張りたいです」と話す涌井さんは、訪問リハビリも行っている。「仮設住宅などでは自分のペースでゆっくり入浴することができません。新施設には、介護が必要な方の機械浴室はもちろん、個浴室もありますので、のんびり寬いでいただければと思います」と西内さん。青砥事務長は「ここには地域の方と入居者や通所者が交流できるスペースも設けています。30年、40年後に、自分が入りたいと思える、そんな施設にしていきたいですね」と話している。

【以上、2014年4月30日版掲載情報】



鹿島厚生病院屋上より見た完成した厚寿苑



オープニングのテープカット（左から2番目・内田和成東日本大震災復興支援選考委員会委員長、左から3番目・有富理事長）



光がいっぱいに差し込む食堂



最新のリハビリ設備を充実



機械浴室、個浴室も配備



明るく快適に整えられた居室を見学する内田選考委員会委員長（早稲田大学商学学術院教授）と有富理事長



厚寿苑のみなさん（左から西内光枝さん、青砥正事務長、市川聰さん、青田浩二さん、涌井美貴子さん）

福島県楢葉町 楢葉町仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業

離れ離れになった子どもたちが一緒に学べる仮設校舎建設を助成

原発事故で楢葉町の大半が20km圏内の避難区域に入り、二つの小学校と中学校の児童、生徒約680名が県内外の学校で学ぶことになった。だが突然変わった教育環境、友だちとの別れ、震災のショックなどから、新しい学校や生活になじめず苦労している子どもが多い。「一刻も早く子どもたちみんなが一緒に学べる、自分たちの学校を再開させたい」。そこで楢葉町は、いわき明星大学の敷地内的一部を借用し、仮設校舎の建設を開始した。建設費は国より2/3が補助されるが、残り1/3と造成工事費用は町の負担となるため本助成に申請した。早く戻りたいと希望する子どもたち107名がいわき市に集まり、民間の施設を借りて学んでいる。他にも60名以上の子どもたちが戻ってくることを希望し、仮設校舎の完成を待ちわびている。仮設校舎の完成は11月を目指している。

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

2012年12月19日、福島県楢葉町が避難先のいわき市に建設していた楢葉小・中学校中央台仮設校舎および仮設園舎が完成し、開校式が行われた。

楢葉町内二つの小学校と一つの中学校は原発事故で避難区域に入り、子どもたちは離れ離れとなって区域外就学を強いられていた。2012年4月、楢葉町教育委員会は「今まで通り同級生や先生と一緒に勉強がしたい」と願う子どもたちを集め、避難先のいわき市の民間施設を借り受けて授業を再開した。当初集まっていた101名の生徒も、現在では142名にまで増えている。「避難先でも子どもたちにより良い教育環境の中で、平等に教育を受けさせなければ」との思いから、楢葉町教育委員会はいわき明星大学敷地内に仮設校舎の建設を計画。この助成金を仮設施設用地造成費用、仮設校舎設置費用、備品購入費用などにあて建設を進めてきた。

開校式で松本幸英楢葉町長は「この震災の経験をした子供たちは、必ずや豊かな人間性と社会連帯感を身につけ、未来の繁栄に能力を發揮してくれる信じています」と挨拶。荒川秀則代表校長も「小学生と中学生が一緒に勉強してきましたが、中学生がよいお手本になってくれています。晴れてこの日を迎えたのも、原発事故の苦い経験に負けず本気で頑張っている子どもたち、情熱を持って指導する先生方、それを支えていただく楢葉町の多くのみなさまのおかげです」と感謝を述べた。

その後「楢葉町を思う気持ちは中学生も小学生も一緒です。いつの日か故郷・楢葉町に戻れることを信じ頑張ります」と生徒代表者が希望の言葉を発表。最後は、同じ校舎で学ぶ三校の校歌を全生徒が覚えてみんなで齊唱した。

教員の一人、栗田親子先生は「子どもたちが頑張っているからこそ、私たちもここまでやってこれたと思います。子どもたちには応援していただいたたくさんの方への感謝の気持ちを忘れないように伝えいくつもりです。新しい校舎で、校庭で勉強できる喜びを胸に、新たな気持ちでスタートしていきたいと考えています」と話した。

【以上、2013年1月31日版掲載情報】



民間の施設を借りての学校生活



明星大学敷地内で仮校舎を建設



仮設校舎、特別教室、屋内運動場がプレハブ構造で建てられ200mトラックのある広い校庭も完成した



子どもたちと校舎を見学する有富理事長



希望の言葉を発表する生徒代表中学3年の田村福太くん



3校の校歌をみんなで齊唱

福島県楢葉町 楢葉町仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業

自分たちの学校で、卒業式、入学式を行える喜びを噛みしめる

2013年3月13日、真新しい仮設校舎で、楢葉中学校の24名の卒業式が行われた。2012年12月に完成したばかりの仮設校舎で生徒たちが学んだ月日は短かったが、離れ離れになっていた友だちと一緒に過ごせた時間はかけがえのないものとなった。楢葉中の伝統を引き継ぎ1年ぶりに復活したゆずり葉祭の中心として頑張ったのも3年生たちだ。松本幸英町長は「震災からいろんなことがありましたが、さまざまな問題を乗り越えてこの日を迎えた君たちを誇りに思います」とお祝いの言葉を贈った。保護者や先生は、凛々しく成長した生徒たちの姿を眩しそうに見つめていた。

続いて3月22日には、南北小学校合同の卒業証書授与式が行われた。仮設校舎の完成、引っ越しなど、慌ただしい学校生活を送る中、積極的に下級生の面倒を見ていた6年生。元気に巣立っていく18名の姿は一段と頼もしく輝いて見えた。この卒業生を含め、真新しい制服を身にまとった初々しい26名が、4月8日に楢葉中学校に入学。入学式は、楢葉南北小学校と合同で開催され、小学校にはちょっと緊張気味だが元気いっぱいの新入生12名（南小3名、北小9名）が入学した。玉澤淳校長は「夢や目標を持ってほしいこと。心の豊かな人になってほしいこと。故郷に誇りを持ってほしいこと。この3つを意識して素晴らしい学校生活を送ってください」と挨拶。小学校、中学校それぞれの代表生徒からは、歓迎の言葉が贈られ、それに応えて新入生代表の大内健くんが「楢葉中学校の伝統を引き継ぎ素晴らしい学校生活を送りたいと思います」と誓いの言葉を述べると、在校生、先生方、保護者から一斉にあたたかい拍手が送られた。

さらに、5月25日には、震災後はじめての“屋外での小学校の運動会”も実現した。子どもたちの願いが通じてこの日は晴天。練習を重ねてきた児童たちを応援しようと、保護者はもとより近くに住む仮設住宅の町民、別な小中学校へ通学する子どもたちも駆け付け、大変な賑わいとなった。児童たちは、大勢の方から応援を受け、元気に徒競走や綱引きなど17種目を披露。未就学児や高齢者が参加する競技も行われ、子どもたちはもちろん、童心に帰ったお年寄りの喜ぶ笑い声が、校庭いっぱいに広がっていた。

【以上、2013年10月31日版掲載情報】



胸を張って卒業式を迎えた生徒



小学校に入学した12名の新1年生



やっぱり運動会は、外でやる方が楽しい！と、大喜びの子どもたち

緑地創造研究会 福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業

海岸防災林再生を地元の産業復興とともに推進

相馬市の松川浦周辺で流出した海岸防災林は100ha以上にもなる。海岸防災林は、津波エネルギーの衰退効果や漂流物の捕捉効果及び飛砂・潮風害の防備になる。再建する海岸防災林は盛土による築堤に構築される。緑地創造研究会は必要な樹木の地域性を考慮した「地域適性苗木」の育成と供給をすべく本助成に申請を行った。この事業のもう一つの目的は、相馬市の産業復興への貢献である。相馬市の生産者たちが中心になり、苗木育成などをすることで、農業施設の有効活用や継続的な苗木生産という新しい地元産業を創出でき、雇用を促進できる。最初の苗木が植樹されるのは2014年の予定。その後も継続的に植樹を展開し、5年後には合計10万本の苗木を植えて松川浦周辺の海岸防災林の再生に協力していく計画である。



以前の大洲海岸



建設記念碑だけ残る現在の大洲海岸

【以上、2012年7月10日版掲載情報】

緑地創造研究会 福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業

クロマツ採種園の竣工を記念し、植樹祭を開催

東日本大震災の津波により福島県相馬市の松川浦周辺では100ha以上の海岸防災林が流出した。その中には、松川浦県立自然公園も入っている。ここは阿武隈高地から太平洋に注ぐ河口にできた大きな干潟で、古くは万葉集にもうたわれた県内有数の景勝地だ。大小の島や岩が点在する風光明媚なこの地は、日本百景のひとつにも数えられていた。大洲や中州には防風林や防潮林としてクロマツが植栽され、河口に広がるあし原と肥沃な干潟は貴重な植物や野鳥の宝庫でもある。しかし、その様子は震災で一変した。

松川浦周辺の海岸防災林の被害が大きかったのは、干潟状の立地のためクロマツの根が浅かったことが原因の一つである。緑地創造研究会は、これを教訓に盛り土による築堤・植栽にあわせた地域適性苗木の育成と供給を行い、海岸防災林の再生支援を計画した。しかし、海岸防災林の再生には長い年月と多大な費用・労力を要する。さらに、クロマツの天敵であるマツノザイセンチュウ（松食い虫）に強い苗木を開発することも重要だ。緑地創造研究会では、この助成を活かし、また福島県、相馬市をはじめ地元の苗木生産業者やNPO法人、東京農業大学などの協力を得て、より強い苗木を育てる海岸防災林用マツ苗種子の採種園の整備を福島県林業研究センター内で進め、昨年に竣工。これを記念して2014年4月11日に植樹祭を執り行った。

植樹祭で独立行政法人森林総合研究所の星 比呂志育種部長は「採種園には、全国からマツノザイセンチュウに強い樹の苗木を何百種類も取り寄せました。私たちはこれにセンチュウを人工接種し、生き残った強い樹を育て提供します。これらが自然交配することで、より強い遺伝子を持つマツノザイセンチュウ抵抗性クロマツを開発できるのです」と説明。その中からこの地域に適した47種類・2000本の母樹苗木を採種園に植樹し、ここから獲れた種でさらに多くの苗木を育っていく。この方法は日本初の取り組みであり、最終的に約11万本のマツ類苗木を松川浦周辺の海岸林復旧事業に提供する計画である。

植樹祭には、近隣の保育園の園児も参加。楽しそうに土とふれあう子供たちを見つめながら「この事業はまだ最初の一歩を踏み出したに過ぎません。松川浦の築堤への植栽は2017年3月の予定ですが、海岸防災林として再生できるのはまだ十年以上も先のことです。ひょっとしたら、私たちはその姿を見ることができないかもしれない。この事業を子供たちに受け継いでもらい、地域住人の心の拠り所となる美しいなつかしい松川浦の原風景を蘇らせてほしい」そんな願いを子供たちに託す出席者もいた。

東日本大震災で発生した津波は、各地の海岸防災林に甚大な被害を与えた。その規模は1100ha以上、東京ドーム230個分とも言われている。今後、採種園では95万本以上の種子が獲れる計算であり、相馬市の生産者たちが中心となって苗木育成を行い、各被災地に提供していく予定だ。また、この事業を発展させて地元での新たな雇用を生み、相馬市の復興を支える事業の一つとなることも期待されている。ここから送り出される苗木が、各被災地を守る海岸防災林としてたくましく成長していく姿を、我々もじっと見守り続けていきたい。

【以上、2014年4月30日版掲載情報】



『なつかしい緑を未来につなげよう』をスローガンに海岸防災林再生事業が動き出した



福島県林業研究センターに造成された抵抗性クロマツ採種園



「海岸林の再生に役立てたい」と星育種部長



約2年をかけ、育てた苗木や種子を供給



地元のうねめ保育園の園児たちと一緒に一本一本苗木を植樹

2015/3
NEW

緑地創造研究会 福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業

美しい故郷を私たちの手で、植樹事業を本格的に開始

2014年11月10日、相馬市の松川浦周辺の松林を復旧させる植樹事業が本格的にスタート。松川浦大洲国有林で植樹式が行われ、地元の子どもたちを含めた約150人の参加者が、約600本のクロマツの苗木を植樹した。

「さまざまな動植物を育む緑豊かな松川浦自然公園は、みなさまの憩いの場でありました。かつて私も家族と一緒にバーベキューをした楽しい思い出があります。この美しい松川浦は津波により一瞬にして流されてしまいましたが、海岸防災林として津波の衝撃を吸収し、私たちを守る大切な役目を果たしてくれました。本日植樹するこの苗木は、松川浦を蘇らせるための最初の1本です。立派な海岸防災林に育つには、まだ何十年とかかるかもしれません。それでも子どもたちの世代、その先の世代へと受け継ぎながら、必ず松川浦を再生したいと願っています」と立谷秀清相馬市長が挨拶した。

ここに植樹する苗木は、昨年4月に完成した郡山市の福島県林業研究センター内の採種園が生産し、地元の生産者に配布して育てられたものである。

磐城森林管理署は、2020年度を目標に1haに約1万本、約60万本のクロマツなどの植樹を計画している。その一部を担う採種園の苗木は、これから多くの地元の方の手で大切に植樹され、子どもたちと一緒に、松川浦を再生するためにたくましく成長していくことだろう。



「松川浦を蘇らせたい」その思いを胸に約150人の地元の方が植樹式に集まつた



植樹式には、地元 磐城小・磐城幼稚園の子どもたちも参加

2015年2月の小野町病院の完成により、本助成による31件の復興事業は、

福島県楢葉町の仮設校舎設置事業および、松川浦防災林の完成を除いてすべて完了しました。

松川浦に植えられた小さな苗木が、立派なクロマツへと成長するまで

さまざまな人の手と時間をしていくように、

被災地の生活・産業が完全に復興を遂げるには、

まだ多くの時間と努力を積み重ねる必要があります。

いまも懸命に頑張り続ける被災者の思いと、それを支援する気持ち。

それを風化させることなく、未来へとつないでいくように、

ヤマト福祉財団はこれからも見守り続けます。